

825
MxH2

岷江入楚

紅葉媛

7

紅葉賀

十七歲

神皇月十余日朱雀院行幸夏

先出内裏有誠樂夏

源氏中將与以中將舞青海波給之夏

藤壺女御与源氏贈答之夏

行幸其夜舞賞源氏叙正三位以中將叙正下四位夏

源氏於藤壺女御三条宮對面兵部卿宮夏

十二月廿日紫姬君除服夏

九月廿日外祖母尼公卒去十二月廿日三月月服滿故也

十八歲

正月一日參朝拜給夏

紫君比々奈遊夏

正月二日參賀取々給夏

内春宮二院三条宮也此院為吉來不審

二月十余日藤壺女御御產男子夏

冷泉院是也

去年四月藤壺里居之比与源氏君有密通夏則嫌妊之夏有

それより二月より十月に終る源中秘抄に横豎に

年紀と云ふ一丁冷泉院三年胎日記より一丁の羅
雖羅尊者六歳耶輸陀羅乃胎也一丁と例よせり不
わやうと云ふ

源氏贈消息於王女婦許年

四月若宮初参門夏 若宮似源氏給夏

源氏折梅子贈王命婦許夏

紫君習箏給夏

斐比源氏与源門侍戲夏

又源内侍於温明殿彈琵琶夏

源氏欽東屋立寄給夏

以中将見顯引解直衣帶夏

此時源内侍五十七八乃二十余れ若人より以中ねと云ふ

但源氏君今年廿一と云はれり此夏より一丁計板敷も板敷も

十月藤壺女御立后夏

源氏仕宰相兼中将夏

中宮入門源氏供奉夏

紅葉賀

義云初心より付る冬の前

義云是は紅葉賀に付る初心より末乃紅葉賀表葉賀

此時の中と紅葉賀と云ふ

一説と云はれり此夏より

一説と云はれり此夏より

義云此は名は符合せりりん乃凡賀と其年此御教と云ふ

て此未だ家等と云ふなり 説文曰賀といはれり相奉慶に

賀と云ふなり此は例

花 紅葉賀についで神泉に紅葉賀と云ふなり此は例

後乃此は賀 後乃言はるなり此は例

雷名賀紅葉の賀 取和乃此は例と云ふなり此は例

以上花名 此は例賀と云ふなり此は例

天皇之御賀ハ

仁明天皇 喜祥三年三月 庚辰 奥福寺大法師等為奉賀天皇

室等満千四十 是初例也 叙曰 又同十月癸卯嵯峨天皇

太后遣使奉賀天皇四十室等也凡厥山海珍味救百捧説而

天皇御紫宸殿音楽逾奏歡樂終日 云

太上天皇之御賀

淳和天皇 天長二年十一月 兩奉賀太上天皇五八御齡云是也 秘同
源氏十歲乃十月より十八歳に七歳よりなる事あり

河内平十月よりなる事あり

私云已上義之命は之幸秘け義は同

河朱荏院の幸如葉隱 此名字は不具卷中花高奏御如

葉賀といふは名目は秘事なり

或抄御説は此乃若くは外より下面白く又河内平は
十八歳に十月よりなる事あり七歳よりなる事あり

朱荏院乃の幸ハ神皇月日十日ありなり

義云三系朱荏院は河内平は遠く終り是後院に下り朕履中
後乃御上なり 延喜乃御宇に朱荏院よりハ字多し御門に
在り朱荏院乃世帝花高よりハ字多し御門乃御宇に位
と云はるは後院に下りなり

行幸

蔡邕云天子車駕所至見令長三老官属親臨斬作樂賜以食
帛民符有級或贈田租故謂之幸 漢儀註 晋灼曰臣臣被其
德以為僥倖 又師古曰幸可慶幸也故福喜之吏皆称为幸

朱荏院行幸之先例

延喜十六年三月七日 幸行幸朱荏院有法皇五十御賀

花鳥ハ此例を用たり

又同年八月廿八日行幸朱荏院

詩題高風送秋韵

康保二年十月廿三日行幸朱荏院

題飛葉共舟輕

十月之例康保二年相當セリ

全篇之儀ハ延喜十六年よりハ一字ハ花ハ延喜と用たり

誠樂と御前と

御覽六試示調示个々々々々々々々々々

小兒也

青海波手八子

義河 南宮譜曰義和御時了大納之

良宰守世義勅命作此彝時依勅改成盤涉調

元八平調

舞裝束
表袴 又小袴
青色袍
蒲菡染下龍袞

面大海浦
裹蒲藺

大海浦半臂舞手向一方横寄波引波之折

明、自、不、大、度、乃、以、中、狗

厄在息以中物夢之此見

秘 疎乃わひ手も花をふう川がよみなり

人はいとなるを

世に乃人ふくくさるる係成にまゐ

高木よりし

花乃三月此花來

深山亦不
所至公

幾云花と深山とありて此の
行も奥——ふれり

秘
げ以中おもひ
くまのなまけ
も海よきま
うやてては
深山

あゝ木り海にあり

花 うつがた九花れゝりて常盤木に居るに及ぶと仲忠を

と花よたふ仁孝殿乃女御降正宮と常盤より申して方々

或抄ひよふらうていふる海山本一面白く

入
了此因報乃也
子
子
子

庚子八月二十七日

京氣より初のもよりまゝ西向きに出張あり

卷之四

面おもひなりしをよそねをあらはる

孫子

義海波乃詠小野望物信作之

往殿迎初歲

桐樓媚早年

剪花梅樹下

蝶燕盡梁邊

佛の御子に
んが

伽陵頻伽

策
化城喻只云聖

主天中天伽陵頻伽色哀愍衆生者我等今敬禮隨喜功德只云山川
渰谷中迦陵頻伽色命今等諸鳥悉聞其音色 迦陵頻伽受
名義集云此云妙色鳥 大論曰在殼中未嘗發聲微妙勝於諸

名義集云此云妙色鳥

大論曰在殼中未之發聲微歟勝於諸

鳥 正法念經曰や城音也哉音若天若人若緊那羅等無能及
者唯除如來音也 河唐云教鳥此鳥鳴時音中轉若空無我常
樂我常 淨し 義云佛乃由伽陵頻伽といふを眼とせし
べもれ声よ此を能く物なりともも仏乃由是をよ及いさる
所居切法也れ又いさるなり 北城喻也乃文聖主と云
天びあよりくけり仏の滅後には如來乃由我國より人
る所よりくか振るなりと云い佛乃より源氏れを能くしる
圖書云くけり即ん天上よりくるなり又淨をよと云い佛
のよき即んといふも此れをよき即んといふなり天よりよ
よりといふも此れをよきと云い佛乃よりくか振るなり

又いさるなりとのこい

桐葉の帝よりけりけり親王大臣よりけり皆感徳なり
これいさるなり 義云 詠乃乃いさるなりをよきと云い佛乃
詠乃乃いさるなりをよきと云い佛乃よりくか振るなり

はよりいさるなりとのこい

源のよきなり

神乃いさるなりとのこい

源のよきなり

義云 大鏡大井乃即幸に延喜富加海乃由是所の由版れ維時親
王七葉より幸なりと云い佛乃よりくか振るなり
淨しこれいさるなりと云い佛乃よりくか振るなり
義云 今仏教後れ其淨乃いさるなり
われいさるなりと云い佛乃よりくか振るなり

うさゆいさるなりとのこい

源のよきなり

くさゆいさるなりとのこい

後意をかりけりとのこい

源のよきなり

いさるなりとのこい

後つれなりとのこい

富いさるなりとのこい

くさゆいさるなりとのこい

くさゆいさるなりとのこい

源のよきなり

いさるなりとのこい

源のよきなり

わいなる水いへ 秘 後つねれ御所の君よりいへあつしめ
あやうなりけり

やれぬなり

いふもききいふあふ

秘 又勅定なり

以中一将もあつしめとけり

家乃子いふなり 美河良忍れ子に秘堂上れ率とせ世継

中七東三条院所家衆人あの子れ君をさしめ

高杉友成りしれ 富のし女 八五君 永宗云 幼穉利成れ人の取腹云

倫子 雅信云 母 多川君 朝道云 陵王云 已上箋

何 新紫雲云十月は朱雀院の年より一とて衆人を居ん

てなれ家れ子とあり 位よりいへれとふなり

名をゆゑるなり

衆の乃るをれりて今れをよも衆人共々下りり

あやうなりけり 箋 巨々あつしめとけり

いふれふい練磨りて勿論なりひなふり多れと大や

い風流なりやとあり 中 源をれ居りいへすい

いふゆめいふとえりてせぬと御所なりとあり
いふれいけり 試樂乃りや

いふれいけり いふれいけり

いふれいけり

いふれいけり 後つねれをせり

いふれいけり 是なり

いふれいけり 秘 聖物源より後つねれ

いふれいけり いふれいけり

いふれいけり 後つねれ

いふれいけり いふれいけり

いふれいけり いふれいけり

いふれいけり いふれいけり

いふれいけり いふれいけり

いふれいけり いふれいけり

いふれいけり いふれいけり

いふれいけり いふれいけり

われりーこと

源の奇れふゆりゆられやふふひとやめで
つらりつらりーれをおきれぬらとふふなりあるーあ
るふふふー切ー

卿よりゆれもあやあり

義云物語の批判

義云いぬぬりれありー一舞と舞ーふふりー

花わや文なり端なりれ文と図かろるーいふいふれ

秘平生いふふりれぬぬりーあふりふふふぬぬりれぬぬ

舞とたふいぬぬりーぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

ふれぬの初なり

追後つか

あふれ神つるーいふふれとあふれぬぬりぬぬりぬぬ

義云海浪いたの樂大層れふふれぬぬの事い運りて知り

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

舞乃若男といふりー一舞と舞れぬぬりぬぬりぬぬ

の武平云浦人の神つるーいふふれと源の立ふふ表ふふりぬ

樂ノ名海色ぬれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

少事云神つるーいふふれとぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

秘舞乃舞大いぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

義云愛乃ぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

是より源のふ

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

花の義舞は日

義云樂あふぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

乃傳いふふあふぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

人の御り

秘舞と云

卿よりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

花れぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

義云花舞とふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

花舞いぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

あふれぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

秘云河則天舞花なりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬ

らふれやみ 持河乃屋より

義國前此伽陵頻伽よりきくうへより

り幸にみきこふらふ 是より幸れ當日にぬ 義曰

義云はるより前日こころぬ

来交りたり 義云延喜十六年三月賀令嚙皇太子

い時乃皇子の保明を子たり

和云いぬ後より乃の源れ由是幸藤原

とあり 義曰 大座右より藤

天平十一冬十月皇后宮之維摩講終日供養大座高藤木種

々音樂今乃唱此言詞 万葉才八

くいぬかり 義云程これ樂うすむりこ 秘曰

けこれなり 大鼓羯鼓之鼓なりてきく

日とひき源氏にゆふけ 試みれ日ありたりきく

秘 祚よりきふりけけつとるよりきく其れは福延せき路

新務よりききあり 和云は事いふ微度れりききあり

それと門乃よりききありききあり

ままたれ女卿よりききありなりき 是又弘徽房れき

いよりききありききあり 義云奥より

いよりききありききあり 秘曰

右族 幸族 又ききあり

宰相より 左座より 右座より

義 樂心のみり 系思のゆれきなり

二人れ宰相 参議左座参議右座きき

御宴樂の事 参議之例 保忠は十時三本

延喜十六年法皇五十御宴樂の事 せよききありききあり

世ふききありききあり 是よりききありききあり

よりききありききあり 義云是よりききありききあり

和云いぬ後より乃の源れ由是幸藤原

私云義云はるより前日こころぬ

日れききありききありききありききあり

四十八乃二一

卷之六 長秋之節 儒云 聖人曰 序之 破之 入之

あり 現代三千六百人^と衆人の立ちゆかぬ 痛楚 農民 痛作と云て

疾風此よりゆく立ちゆ 此時幾比巴る 上義

悔者青浦波此前小吹樂人甚多不歸上作兒之

并
軍人たる事又り然の事もやいぬ縁は物の教と云ふ事

らるゝも「せむ」のゝと塩代、地下、草、上、桐、すゝ、り、え

いひあふくあふくあふる

秘 四十人のふし

公あまの
くまの
軍人の
活意は
その
あまの
あまの

樂以礼礼本と云軍人乃禮代之者なりある

田子汝山抄

朱蘆花池山房

青海の⁵⁴御くら

策少原力疾

あそび

此毛多可之者根多也

つるり

冠
角
加
之
又
以
花

ちり山

萬々
 清々
 萬々
 萬々

之うに事なり。花より此枝を根に原のより

これ銀葉なりとあるよりわかれはなりとあるよりとある河海二

之良親王此軍乃賀正來上之儀伊衡如臣

萬代乃翁の心蓮收白菊としゆやとしゆや
 吟了

折御前花より事

西文抄

陳時

康保三年三月丁

一
目
花
裏
又
明
月
如
倚
後
折
花
排
不
下
冠
已上箋

石大將之印

箋

系焉之外之人也 秘曰

實乃實地之君子也

と氣と是と感とある振たるとあり

又なれど



試ふの時もあえより 秘月

爰更典以爲之
 賦亦乃白以之
 爲之

多分一〇〇り強と

いふあり

黃河

市ノ有取鑊手ノ入鑊ト云

後於河郭云二村山と云人入也此夢也今ハナリナリ也歌眼

浪云、旅ハ入緩トナレフニテ必シクテ面白キ中ニア

[illegible]

養育云々云云
右箇等々々人
此入緩と帝
と云々云々
の

物之類也

秘
地
乃
銅

音 香 度 此 所 有 乃 異 乃 有
 音 香 度 此 所 有 乃 異 乃 有
 音 香 度 此 所 有 乃 異 乃 有

寄女御之書

秘桐壺此乃一々此也

義
洞壺帝才四皇子雲兵部卿官忠公なり

高柳村

河
秋風樂
盤涉調

石塘石

源の帝よつとくやそとていつみそと

あゝいひたる 雅明親王此セタマフ御方ナリ

二、三、四、五、六、七、八、九、十、

秘
わたりぬりてゆきと
奥に

イ
ろ
り
り
せ
依
よ
り
り

義
必りて興ふは

私之憂滿新風予此以爲

歌謡此舞乃世に流るるをこそよみ

源氏乃中將正之位

花史元記云貞觀以來奉賀時有叙位之例

箋云今日行幸賞必可有之又奔之賞可有之勿論之昇進哉

梁乃之

秘
正四位下
叙
少
弐
日

箋曰

けろよ初めなる

叔源子幼之者眾矣

源の何事にもとくれりる所は歎息も何れに
よくもこれ常事ともおこりやうと

スルヲ世ゆゑ

叙
源のうた乃せし麻

お世に戒めのゆゑに云々

文ハ其れ由リナ

五ノ

松
少乃不れ里の亭人退かゝりて本なりと

うひひわりとよとよと

後臺此御あつりとうふ

ありあけの空に雲を吹く

おやいあみいさへうけと

秘夢之り

オオサバ

いそみろ草

策を以て人にたりて人の爲に

一 舟中

松云いり
い草堂いり

み跡をたるとあは二名宛へ入ひくまふとさやれ奉と

わたりひうふく
是はあはれなり
運ふる時なり

おほふあゝあやう

夢了此句

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

葵ころるは雲のうらさへ

かういふけさるゝに平生れゝ根のゝとさるゝにふゝゝ他人よもろ
ふもろゝゝ現物ととと 匿怨友其人ととと

海の如く

夢と此の心下石是なる所あり

源の文脈に於ては、そのひやうに

あつたてふ

夢之此心
何處何處
何處何處

[illegible]

人より多くをくち源のふれ

又夢をわめく

松云此後無一義利之語

養之れ別々もふひるふ本花あり

うゐ
く
や
れ
り
初
之
御
手
福
と
也

娘了そわい 燈ふたそり 燈へききそり 燈へききそり

是よりばあれ事なり

秘
乃
ひ
ま
ま
あ

心海に三つと山あり

少公
内より
元禄の
字々々

[illegible]

とまぬのゝひかりなり

源のきよはる二葉花よりつゆ人も

或說乃臣方此旅之至是也

婦之迎（あり）時より恒常の二条院

のあれ射なり、
ゑの位なり射と
射なり

源

ふり乃中もより男をうけてありそ

三光院傳授の時とて、
一書をわたりし人となす
と云ふ事なり。

九種同之

つとむるあり

いーうーろさ海へ

源の如く

若かりて富れしゆに

かゝるらん

元来うへんやうにふた二つありかゝり

てゝかゝるやうな物に成れ源のふたつとせむとせむなりや

若かりて富れしゆに

あゝいひつゝ

いゝと源の如くはふたれ本ふよる

又後重れ山見おれいふゝまの根柢人おまゝいふとせむなり

ゆゝゝゝ

あゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝ

源の根柢れつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝ

あゝいひつゝ

いゝと源の如くはふたれ本ふよる

かゝるらん

元来うへんやうにふた二つありかゝり

てゝかゝるやうな物に成れ源のふたつとせむとせむなりや

若かりて富れしゆに

あゝいひつゝ

いゝと源の如くはふたれ本ふよる

又後重れ山見おれいふゝまの根柢人おまゝいふとせむなり

秘 友重れおるる麓中へ若かりて富れしゆに

いゝと源の如く

元来うへんやうにふた二つありかゝり

てゝかゝるやうな物に成れ源のふたつとせむとせむなりや

あゝいひつゝ

いゝと源の如く

かゝるらん

秘 源の如く

てゝかゝるやうな物に成れ源のふたつとせむとせむなりや

あゝいひつゝ

いゝと源の如く

いゝと源の如く

直々

若かりて富れしゆに

いゝと源の如く

あゝいひつゝ

いゝと源の如く

いゝと源の如く

いゝと源の如く

若かりて富れしゆに

あゝいひつゝ

いゝと源の如く

いゝと源の如く

秘 若かりて富れしゆに

私云小幡おろそき事 根源抄あり

しーれきれおろそき 源の紫のうきとさうのきれおろそ

きふよりい 元日なれおろそきなり

うらあきおろそき 秘源なり

いけーおひきとーとさう ーあてやそなれとい

けーとさうと

きれおろそき せきそきとーわひふいおろそき

人のわきふおろそき

三尺の内けーとさうい 三尺の御厨子二双なり

ちいさなけー 比作家のけーなり

なやらーとさういねさう 秘紫の刺しけいさなけー

多追讎十二月晦日也 鬼屋ひらき

義云いおろそきと追讎れきとさうい

義河云金谷園記云 以下書き 為陰氣時純陽氣始来陰陽相

微化為疾瘡之氣為人象作瘡黃帝使防相氏黃金冒身着朱

衣手抱捍縮口作讎々之色以駭疫瘡之鬼至今歲除夜為之

王建 宮詞詩

院々焼灯如白日 金吾除夜進讎名 盡袴朱衣四隊行

鬼屋ひらきと追ノ字と屋 沉香火底坐吹笙 除夜は讎と追本

とも鬼屋ひらきと追ノ字と屋 又讎ノ字と追本

私云世中がきと界と書中れ儀式公事 根源抄あり

多中あきと書中れ儀式公事 根源抄あり

ありおろそきと追のひらきと追のいねさう

いとあきとさう 元ちきり紫のとれいさうとさういねさう

きんいさうい 秘源なり

きんいさうい 秘正月一日なれさう

はきれと 源のつらわひいさうとさういねさう

おろそきのなれ源のき 秘あきとあり

ーとさうい 秘少細さうい

おろそきとさうい 是さうと少細さうい

おろそきとさうい 是さうと少細さうい

少細さうい 是さうと少細さうい

源よりとろけぬをいふ

ありぬる 秘 夢上中ニ云ふなり

いりふされり 秘 石是なるは事ごとし

いりぬれ 源のいれとふなり

源中なり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

たろきふとれ重信

まふ 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

正月二日

名ふ 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

あり 秘 夢上中ニ云ふなり

昇
正三月中旬に源殿より文人となりて約と仰り備せし事あり
いとたかしひは執柄亦也袍と名を保之信西の約と候に候
しるし一任 松云義に事此事しるしとて送られし

松云公更根源抄云に家正月廿一日に家より一四に此
家より仁事殿より約に文人た約と仰り約と仰りて
やうし御前より備せし月廿一日廿二日此約に日あり
らに日約に約に一二此に後親と云ふは若菜アツメを
約に保之は信之約に約に後親と云ふは若菜を

松昇一任とて云ふ一ありてお遣せし不審に候
西宮より約に

それいふ事あり

秘 左方乃初

められぬ事

送奥なる御といふ

をみられし

是より保の事といふ

いふ事あり

秘 源といふ事ありとていふ

ていふ事ありとていふ

さんり

何處座之日参賀れ

心云文一院

後河内 桐壺帝

春宮 朱雀院

一院

准寛平法王義鳥之

花云陽成院と云ふ

秘 一院 花より

并一院をみられし事あり

後つられ之事あり

源の事あり

うみられし事あり

源の御事あり

如座をみられし事あり

まの御事あり

秘 後つられなり

おられし事あり

後意の事あり

此の事あり

後つられし事あり

源に月より参賀の事あり

二月よりこれお遣しあり

昇 源氏参賀に四月より参賀あり三月より参賀あり

秘 三年三月より参賀あり

八月より十月より参賀あり

秘 八月より十月より参賀あり

秘 八月より十月より参賀あり

け月ハミヨモヤ

正月より三月まで

行違ふてぬらぬ

三月十一日

田中 三郎

心裏にも御座の用にて

知人の神を此處なり

御所の宝

御懷妊此本も似との字よりなれり

り
ろ
る
る
う
養
あ
り
と
前
は
る

文心雕龍

後以

身之所行

引寄より次

御公にも

後つて此の如く御座るを伺ふ

又 各 人 知 所 行 止 之 方 明 乎

中將の友に
あひあひと
あひあひと

秘源可

松江抄より

愛れ本^とけ所産の月々延ゆるそそは源の家り子

とし命を祈りたふすあふ

御土庫

秘
此
時
の
祈
り
は
予
盾
雲
々
と
見
え
る
義
同

さしあて

その事ふあてなり

世の中は了りなきもの

秘
發
不
此
心
養
同

宇土云後重御座のゆいふれりもあそりちうにえんしとて

松云此為養子與子久保の心と云々也

[illegible][illegible]

先山の墓にも春の心ありけり云々

源のゆゑに

二月十餘日

養云吟泉院

秘
一ヶ月に之なり

名姝たゞ心も富みと

いねの所産をいふなり

名所記三卷此より中巻より下巻迄あり

余乃中

葎意れゆふといふもあや

此乃為是源の密通と云ふ所ありと云

弘徽殿なやろけろま

呪咀

行々々々々々

うきとくしな

[illegible]

はしりあへ

は傲殿の者うたはひの時もあへてあひあへていふとわ
くあひあへたはそれよあつていふりてあへてあへて
うへあへたはなり

さへやいさういさう

あひさへやいさう

うのうのうのう

うのうのうのう

人あへたはうへ

秘源なり

日とほりあへ

人のあへたはうへ

うのうのうのう

え源なりうへ

さへやいさういさう

じつうけあへ

うのうのうのう

あへたはうへ

うのうのうのう

秘源なり

宮乃のあへたは

秘源なり

あへたはうへ

秘源なり

すえ源なりうへ

人乃のあへたは

秘源なり

身れあへたは

秘源なり

あへたはうへ

秘源なり

うのうのうのう

秘源なり

うのうのうのう

秘源なり

うのうのうのう

秘源なり

あへたはうへ

秘源なり

秘源なり

あへたはうへ

あへたはうへ

あへたはうへ

人けなうへ

秘源なり

あへたはうへ

あへたはうへ

秘源なり

んぞもさぬさういふつねと源の事いふくすへありと存る

思ひくすなり
秘 物つゝゝみ切つゝ

くねくねいふなりなり
源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

人の物いふ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

秘 源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

うらけいひつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

人ありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

えとありつゝ
義云定て義の源の事いふつねと源の事いふくすへありと存る

源生 東文之立 源之り 本之

夕陽となり

後臺の先帝此皇女也

となれりや

并 障へ 白圭 壹珣 あり 変ありと云

卷文の源は似てゐるが、又中なり

中々山形

源一子と云ふ者盡く此方あり

羲之孫也 若文士之也

或抄御門のり見ゆと

和合義

秘勅定たり 箋曰

叙源子て作（義同）

中事のうら

着文此御より物文此御より

分々山部

物のことなる事なり

似當年之好

[illegible]

三才圖會

ふの鬼子

三
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

秘
比ほに齊かゝ如切如磋如琢如磨瑟兮僖兮赫兮喧兮な
よの文帯ゝ 義曰

九禪拙瑟倜恂慄也赫喧者威儀也

三つ子

或抄面起れり

私云前ノ初^ハありてれまうるなりとてとそ是ハ東面すと
一ある初^ハればいふくく川あふといふを路くく更さ
くあなともうけくも義をもとめ初^ハれ末くより
さるくく海く中^ハれうろはうろやとあるとゆひ
りり原の公此一とらにあらんや〜神女といふくなくしり
たり〜とらぬ〜

関書第の字此れき

源の落後もありぬ

物より先
君實し知さずん人の為より先し

我が身は、これに似てゐる。さうして、さうして、さうして。

蒙玄源の象身と自愛——終ふ所あり

わづらなむ

紫
子
地

まゐりな

友不此う海なり

中將平くあらは

あゝ

少事二家乃心傳の位より方へ教盡れ所

くく文庫とてふふめよひうさねのとれおろけろふて

あふぬき

乃前裁乃

何となく暮るるに留とみくそ

夜にやみふにわさるといふもなりし

夢溪筆談

孝子記 義回

源

一、此乃公之志也。病者、海之方也。此也。

義曰新古今雜上贈皇后宮よきひくきふよきひ

時を義孝に乞ふを乞ふに非ざる

外之

惠子女王

[illegible]

川方秘藏

私云此哥ふ二れゆゑに河六品を抄くより始は
海潮乃るなりとこれむともの多しとて尺首ヤクサ也

あまの事なれどて病なれどもとてす

何れと云ふ文と云ふれは後意よりして云ふ
かゝる文と云ふと云ふ何れと云ふれと云ふ文

をきいてはつて、次ノ親ト申す可成り、
くや、切な思ひつゝ、世よりや、嘆
き、れども、終事死

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

さるねきひ

秘
發意能水引

多
ちりりりり

何
ちりちるをいふことなりと云ふ

あゝ一ふのふかれい磨きとてふれまゝとてやれふよゝとて

秘一字なりと命婦
ウエリクヤル初
箋曰

私云 匪佳 麦 子 子 子

常夏となりてあつた

名之曰河
曰吳名之
曰此物吳
名之曰
曰本亦欣
曰

物に似たりと云ふ所は、
此の如くなり

ふやれまゝとるゝとあそびに麻友中とゆふとふらふ

下へ竹をくぐりしりあふるにうねりて是なり

子以爲此

只此一花之苑

二部

月
御
前
御
下

物
之
所
在
也

あられは知りて
表文は中々に物おれり

神々々々々々々々々々々々

芳林苑
芳林苑

うやうやうの暮

上
海
一
切

秘
意
ゆ
う
く
く
く
あり

ありふあうもふうあふあふあり

まゐの事あれい 秘 源も此處にあらんといれり〜た〜
源も此處にあらんといれり〜た〜

うま〜たるほど源もね う〜た〜た〜た〜
う〜た〜た〜た〜

し〜れ〜た〜い〜 二条院乃る蒙紫れた〜た〜
し〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 源の御なり 大う〜た〜り〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 紫の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 二条院(源の御なり)〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

あ〜れ〜た〜い〜 秘 源の御なり〜た〜
あ〜れ〜た〜い〜

は外に中ノ絃一筋移る細く十三絃ノ中ノ細絃といふ
河内あぢき説相違 人の兄才れ初なるうと中れやうといふ義同 已上数入

秘 第廿三絃乃うら半^ハ為中^ハいふ筋れ絃乃そん其乃そん
の中れ才一のりそんといふ兄才ともやうと中やうと
のう中ねらげ物係より中れ絃乃せりいふやうと

昇 中れ絃乃うら細絃よりし移りそん中れこのうと
いふや 義多ノ後有焉

平調うらうと 今案平調よと 今案平調よと
そんあうこれと一越調とそんあう第一一越
調とそんあう一越調と二根よりうら一
越調といふとそんあうとそんあうとそんあうと
一越調と云 又保曹呂俱世利ハ物一越調也^三樂ノ平調乃曲ニハ
わんえ平調よとて其調子とをわんえ後呂色
也とてわんえとそんあうと一越調やと云
これ色平調とて已上 洞院大將入道 公教号 尺あり以件
記嘉院

自筆写之平調より絃乃せりいふ品一越調又こゆ律平
調色よりそんあうと平調よとそんあうとそんあうと
ろくせりハ物一越調ノ樂ノ平調ノ位よりそんあうと
あうとこれハ過法平調也といふやと平調より
わんえとそんあうと平調律とそんあうと其乃調子と
とそんあうと物一越調とそんあうとそんあうと
とそんあうとそんあうとそんあうとそんあうと
わんえこれ調の調子とそんあうとそんあうと
あうと今れそんあうと吹事小がわんえ
我云はわんえと一越調とそんあうとそんあうと
ハ中乃絃乃減み切あうとそんあうとそんあうと
とそんあうと平調ハとそんあうと一越とそんあうと
とそんあうとそんあうと 我云は後心ゆとそんあうと
とそんあうと一越調とそんあうとそんあうと
と平調よとそんあうとそんあうとそんあうと
とそんあうとそんあうとそんあうとそんあうと

長亨二年十月首
記之同人記

いとらゝめて
源北公
ほうなりありひきもや
源の雲よれり知
るをけきぬ
急乃さゆ
それしゆひも
歌し一日とての恋しきと源の知

役送して廿五人より廿六人信勝ノ典侍は後より御厨
子所ハ采女共中と撰り得選りて得選役送し令婦人信
勝ハ信勝ノ典侍渡節會共門内膳司ノ晴ノ御膳共采女
見シ供ス信勝ノ采女共 組ハ上膳共下膳共共町共
共ハ云已上花共ノ分

共今も花人として内裏は信勝も賀儀共の如し 一頁

うらふあゝ うらふあゝ
うらふあゝ

源のてふ事共うらふあゝつてたれはうらふあゝ
ゆへ共うらふあゝつてたれはうらふあゝつてたれはうらふあゝ
うらふあゝつてたれはうらふあゝつてたれはうらふあゝ
とつてたれはうらふあゝつてたれはうらふあゝ
つてたれはうらふあゝつてたれはうらふあゝ
つてたれはうらふあゝつてたれはうらふあゝ
つてたれはうらふあゝつてたれはうらふあゝ
つてたれはうらふあゝつてたれはうらふあゝ

は後共源乃共うらふあゝ 一頁

私云系共之共うらふあゝ

人共源乃共うらふあゝ 一頁

それ共うらふあゝ 一頁

うらふあゝ 一頁

さうい共ノ字共ナカハト読ハ百とせれあつては共源乃共うらふあゝ

私云は共源乃共うらふあゝ 一頁

いふ共 源のいふ共うらふあゝ 一頁

共源乃共うらふあゝ 一頁

あゝ 源乃共うらふあゝ 一頁

物共の共 源乃共うらふあゝ 一頁

共源乃共うらふあゝ 一頁

は共源乃共うらふあゝ 一頁

共源乃共うらふあゝ 一頁

共源乃共うらふあゝ 一頁

共源乃共うらふあゝ 一頁

深田仍此由よりくさるる人への所にて

くさるる人

くさるる人とのよりて 兼日

中院吏書曰御りくさるる人の事にて御りくさるる人といふは
いふ人の文乃装束とありてあるものなりといふ人といふ
一説云所装束なればくさるる人の門の文れば家の由衣とあり
くさるる人といふくさるる人といふ

兼 為人記中十三日御装束御装束 侍臣之間撰誌事人依
毎定例皆着當色袍 謂之樹源紫也 兼也仍茲人而 今業由よりくさるる人

兼 為人記中十三日御装束御装束 侍臣之間撰誌事人依
毎定例皆着當色袍 謂之樹源紫也 兼也仍茲人而 今業由よりくさるる人
くさるる人装束くさるる人装束とありて御装束よりくさるる人といふ
兼 為人記中十三日御装束御装束 侍臣之間撰誌事人依

くさるる人装束くさるる人装束とありて御装束よりくさるる人といふ
兼 為人記中十三日御装束御装束 侍臣之間撰誌事人依
毎定例皆着當色袍 謂之樹源紫也 兼也仍茲人而 今業由よりくさるる人

は日伯 秘 深田仍此由よりくさるる人

くさるる人装束くさるる人装束とありて御装束よりくさるる人といふ

くさるる人装束くさるる人装束とありて御装束よりくさるる人といふ
兼 為人記中十三日御装束御装束 侍臣之間撰誌事人依
毎定例皆着當色袍 謂之樹源紫也 兼也仍茲人而 今業由よりくさるる人

くさるる人装束くさるる人装束とありて御装束よりくさるる人といふ

くさるる人装束くさるる人装束とありて御装束よりくさるる人といふ
兼 為人記中十三日御装束御装束 侍臣之間撰誌事人依
毎定例皆着當色袍 謂之樹源紫也 兼也仍茲人而 今業由よりくさるる人

くさるる人装束くさるる人装束とありて御装束よりくさるる人といふ
兼 為人記中十三日御装束御装束 侍臣之間撰誌事人依
毎定例皆着當色袍 謂之樹源紫也 兼也仍茲人而 今業由よりくさるる人

くさるる人装束くさるる人装束とありて御装束よりくさるる人といふ
兼 為人記中十三日御装束御装束 侍臣之間撰誌事人依
毎定例皆着當色袍 謂之樹源紫也 兼也仍茲人而 今業由よりくさるる人

くさるる人装束くさるる人装束とありて御装束よりくさるる人といふ
兼 為人記中十三日御装束御装束 侍臣之間撰誌事人依
毎定例皆着當色袍 謂之樹源紫也 兼也仍茲人而 今業由よりくさるる人

義 少後麻をてつりなりとわさるなり

紅云男女とも大庭を司事す其後麻中或は終る極
思ふれ何るゝ客へてなりと司事す終る極

あつてゝすゝあは 深麻をたふなり

わつ紙乃うのりなり 紅乃うはしは事ななるを

あつてゝつるなり極めさるこれゝなり

又あつてゝ何事なりとあてするゝなるあつてなり

あつてゝなりとわさるなり 義 泥をわさるなり 秘曰

あつてゝなりとわさるなり

義云ゝ人の中あつてゝなる極めは深田内ひ

あつてゝなりとわさるなり 義 少曰

紅云はしはしなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり 三光自筆は義の義はたなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

下あつてゝなりとわさるなり 深田はしはしなり 秘抄

森下あつてゝなり

大わゝれ乃森の下あつてゝなりとわさるなり 松

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

あつてゝなりとわさるなり

世帯より先へ大あつたの處と麻の縁より中へ入ると
つねに源の家の處をたゞに海を渡るに方々をたゞと
かゝるものなり

秘 べいん伯好女はくろくはなはれともおのれなり

お源いびい伯好なりとておのれはあはれ合ふなりとて人のうんや
若くはなりとて此の伯好の何ともおのれなり

源の伯

若くはなりとて此の伯好の何ともおのれなり

若くはなりとて此の伯好の何ともおのれなり

若くはなりとて此の伯好の何ともおのれなり

若くはなりとて此の伯好の何ともおのれなり

若くはなりとて此の伯好の何ともおのれなり

若くはなりとて此の伯好の何ともおのれなり

若くはなりとて此の伯好の何ともおのれなり

若くはなりとて此の伯好の何ともおのれなり

蜻蛉日記

さういふおきしはゆきあふなりとておのれはくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

お源いびい伯好女はくろくはなはれなり

秘後よきうきうんといふ人なりとて源乃おらぬや

おひきうきや 源乃おれとてうきうきよのぬるお

同く 乃てこれとてお

せめくきうき ちめくあるうきよきうきし源乃おのせ

めこれ事やといふおのうきおれとてうきよき

はめめきとてうきよきとて

橋うき 源乃おれとてうきよきとてうきよき

ぬる身とてお 秘後よきうき一曰といふとて

奥 せ中にぬりぬるおのぬれとてうきよきとて

秘後よきうきとてうきよきとてうきよき

首れ川おれに橋柱のぬれとてうきよきとて

うきよきとてうきよきとてうきよきとて

源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

い 乃てこれとて

源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

あやうきとてうきよきとて

にぬりぬるおのぬれとてうきよきとて

あやうきとてうきよきとてうきよきとて

奥 源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

義和川おれとてうきよきとてうきよきとて

秘後よきうきとてうきよきとてうきよきとて

源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

い 乃てこれとて

源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

秘後よきうきとてうきよきとてうきよきとて

源乃おれとてうきよきとてうきよきとて

乃君也

卷

建仁寺

此乃其人

義源寺

うづりまにうづりまやうづりまのうづりま

衆人之言下早限ありぬ中おはけり
あふふ

此人即源氏所出之弟也及子孫無源氏之貴也

しにふれは乃多像乃るわ平とふうや川方よりすい

取中なりともなうさめを死する
義云うそれこそである

此好まやと節のこれ評（秘に）
私云因修乃心源氏建なく

心子なるを以て中將と名づけしを以て

源氏物語の巻之六

又自乙卯至丁卯一歲二省所獲之數

源氏傳乃双中將よりいつとあるを深く

吾之從弟よ逢せんとて
 今も歸る所を或抄中
 抄中より見せし
 不慮

故運を以て此の處ありと号す運とて海なりと云ふ語を以て

とやうな方々へも先づいふべきこと

私云よりよつてこれらゆゑ

源氏物語

前より海を渡るより
 近き方へ

子方夜以繼日不寐中夜起坐

平山先生文集卷之六

[illegible]

ハ免向好文過々率有りといふ哉や

源のあはれ

源の所々よりぬきとるまゝに

久しうとて

温明殿
篆云苑中衛ノ東ニ在リ内侍所也

古語拾遺曰第十代崇神天皇漸畏神威鑄改

長慶集卷之十

白氏文集

夜泊鵝鴦江秋月澄徹隣舫有歌者發調堪愁絕歌罷繼以泣
泣老通微咽尋聲見其人有婦顏如雪獨倚帆檣立婢孀十七
八夜淚如真珠双々墮明月偕問誰家婦訝泣何凄切一聞
一霑襟低眉終不說

史記曰是時卓王孫有女文君新寡好音故相

如繆興令相重而以琴心挑之相如之臨邛徒車騎雇客閑雅
甚都及飲卓氏弄琴文君竊徒戶窺之心悅而好之恐不得當
也既罷相如乃使人重賜文君侍者通殷勤文君夜亡奔相如
案之鄂別於叶物語意孔

源内傳色ハシキリノ山城寺

とうとうひきつくと鄂州へて樂天ノ并とて歩くとある。これ（ある）は
 び文君定易乃却に鄂州はなりとて人々もやむ。うりうり
 とある。海は流をわたりて鄂州をたぬれり。つと
 復て襪より肌ゆりれ。あともと源氏をたぬる。鄂州の
 井はうととて天乃歩くとある。やむ。彼鄂州乃

廿八十七者と云ふより係に付此とけの所は色なるよみなり歟
 ありと云ふは是よりて是よりたれどもありありと云ふは

それある卑久君よりて司る相妙よすさあこれく白紙吟と
云ふを地より相如きとて表と云ふをうゝ如原にゆのみ
と年よりて人のりてあふ恨はふりて物終れば若又ふりて
ふりて卑久君よりて司る相妙よすさあこれく白紙吟と

て邦列と用花名を云ふ文者と用ひり邦列と云ふ文集第十二夜
聞歌者宿邦列と云詩ノ事（只）一（）ふ名と云う（）尚名と云
（）せ（）る（）中（）是（）と花（）不被用（）なり（）時詩甥婢十七八と云句
あり是（）と鈴相遠（）と云又（）と名（）と用（）子（）名（）の（）因（）る（）相如（）望（）み（）と云
て挑（）く（）卑（）又（）名（）と（）ゆ（）され（）も（）後（）に（）指（）して（）白（）吹（）吟（）と（）能（）自（）る（）
は（）年（）齡（）相（）對（）し（）る（）れ（）有（）り（）又（）名（）乃（）姓（）と（）執（）き（）り（）と（）理（）有（）り（）と（）似（）す（）
（）と（）云（）も（）青（）臺（）紙（）は（）邦（）列（）と（）同（）名（）の上（）に（）吳（）梅（）と（）及（）さ（）る（）也（）已上秘藏曰

源のふり

源内此巴齐屋々々

君の御心

源のうゝひのうゝ

あつたやれまのあつたやれまのうゝひのうゝ
らつたやれまのうゝひのうゝ
わつたやれまのうゝひのうゝ
わつたやれまのうゝひのうゝ

催馬樂東屋律二段

義

秘同

わつたやれまのうゝひのうゝ
わつたやれまのうゝひのうゝ
わつたやれまのうゝひのうゝ
わつたやれまのうゝひのうゝ

第二版乃初

源のうゝひのうゝ

義秘同

わつたやれまのうゝひのうゝ

義秘乃其よりうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

源のうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

秘

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ
わつたやれまのうゝひのうゝ
わつたやれまのうゝひのうゝ
わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

源のうゝひのうゝ

源

わつたやれまのうゝひのうゝ

義

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

わつたやれまのうゝひのうゝ

以中のお母君れ

秘 中あゝらに實にこれゆき

源の以中お乃好まむとてとて此をうきとされと源とある
と中あゝらに實にこれゆきとてつらに川とんとたふ以中お
あゝらに實にこれゆき

是城のつらむと

源に川乃をけよのこゆと以中おれと

きつらと

以中おも川乃をけよのこゆと以中おれと

あゝらに

義玄油のこせりなり

以中おれをうきとたふとたふと源とされとたふと
たふとつらと

君いとけて

同は川乃源のつらとたふとたふと

と源とたふと又後意乃中事とたふとたふと

は中將と

源も中將とたふと以中將とたふと

とつらと

源とたふと

太史といはれ乃とたふと

秘 以中おと源とたふと

系留之系人なり

おれとたふと

源とたふと

あれとつらと

秘 源の利

くもれあゝらに

中あゝらに實にこれゆき

源とたふと

秘 以中おと源とたふと

中將おれとたふと

こがとたふと

以中おのつらとたふと

中あゝらに

源とたふと

中あゝらに

源とたふと

又こがと

なとたふと

源とたふと

はとたふと

はとたふと

以中おのつらとたふと

中あゝらに

はとたふと

源とたふと

はとたふと

以中將とたふと

はとたふと

源の源とたふと

中あゝらに

中あゝらに

以中將も源女をうられしをりたり

あり君とて あり君といふなり 以中將はむいひて

とよりて 佐ちよりさゆなり

かゝるいひ けしきとていふいふにれとあふなり

このまゝいひていふに 内侍のまけのさゆにけりなりい

いふまゝいふなり 源女もあれをいふにけりなり

いふまゝいふなり いふにけりなり

五十七八乃人 秘 音 讀し 源内侍乃いれりなり

さゝるさゝるいふなり ね二十乃りなり 秘 二十乃りなり

わゝねいふなり 以中將のまけなり ねいふなり

さゝるさゝるいふなり 源内侍と中將とありなり

おふなり 秘 鳴呼

いふなり いふなり

つゝいふなり 以中將のまけと源のつゝいふなり

いふなり 以中將のまけなり

いひぬ 以中將なり

いひぬ 源のまけなり 川守男なり

秘 源女もいふなり

源女もいふなり

源女もいふなり 源女もいふなり

いふなり 川守男なり

いふなり

いふなり 源女もいふなり

源女もいふなり

源女もいふなり

いふなり

いふなり 以中將のまけ

いふなり 秘 音 讀し

いふなり 源女もいふなり

いふなり 源女もいふなり

辰

源子

く襦袢物と云ふは夏衣と云ふと云ふは此心と云ふは

何
次中將と云ふ人ありて其の地を次とわたりて之と讀み

架

[illegible]

戴玄以吾れ名やより出んとさうりふよとて漢川をめぐると

其の此の姓名は此と云うやうに凡そいふやうで

夜衣をぬぎて
ふと云ふ

うゝやふに
井
あゝうゝやひうもしるゝ祈れり

了たふ中れをりふ

秘

移
以中^ヲ相^ヲ具^ヲ一^ヲ海^ヲのふたり

私云うゑなればふふなり
くわふふ持此神を
臨み

君

源の如く

門傳のあき

多謝月之介氏兄

河

前より衣よりとよりてあり

源氏物語

源に依りて名をとりしを以て其地を以て名を以て之に依りて其の多ありふ

美秋

疎々云々之々々々々々

少々云々
 〇ハ分れ
 縁もろ
 死あ
 ら分れ
 りと
 傍る
 ハ
 〇ハ
 〇ハ

和云は義なり
うゝそゝふ浦よゝせゝるり

そこをわうる

楓葉同川

何
あまそけ援を少く
地味河そこもあう
なまよりねと
あへて

おしるのふゆ

篆秘面運た尺く海や

りるや

一、

此乃高也

源氏

五
保

わゝ多能く彼は心をさへくしくあつた

よせん殿の所よりうゝむくはそをそゝむ

あゝあゝにさうとさう——やうう

秘

叔
政中將とて
心へ事おれ
花鳥
七人政中將

今案わゝ立一浪以爲一也久破以源

心算可也。連て以て志とす。母一ある今も又世にありて

幾云泥、以爲之、源也、從之、泥、不、審、六、可、見、其、所、以、故、之、詳、審、

山崎 三郎 一孝 孝子

[illegible]

これより
おむかひのありき
源氏物語

おむかひのありき
源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

三才

秘 中のおのゝよりくまゝく

花源のふりし神

いそろえ

源乃知なり

いぢやとえさるやうに

秘
い
き
な
く
て
い
と
深
の
き
お
も
い

神此之ヲ以テ

うしろの紙

節々あり

涼

井中へいこもややとあやふふに帯はるるそふふに

何
う
中
是
は
う
と
何
し
う
と
何
れ
や
え
ん
と
何
色
に
西
歩
す
と
く
と

あつちゅうにふんとあつちゅう

七

石河乃、ゆゑふ節とぞ、
 様々々々、
 るくみ正方ちういたる節

そとれは此中ハ多し
催示
呂石川
今案并
と人
そ
れ

催ふ示
呂石川

今案常女之字

石河忠孝より又東海此らのよくなりを

ちぢひうこもろつてもあえとそねふとあれは常此こ

ふせあり但ちうきふといふは事なり今

あれととるに本と方より申おのぢいアーと二藍

水とてふは、ちやうど、
大なる、
石河

れ、海へ入る。さうして、あつちまで、ぬかりもなく、是迄、行方

名中の必争也と云ふ如く是れ其の體よりいへる也

縁の中へ讀も石河曲と云ふ一也一を云ふ中へ

乃海軍に於ては是も志人なりと云

第

秘傳子不乃石川玄月之世此常人のあふぬもその用なり

つちのうへに
取寄つてゆきよの舟をよ

立之

以爲之也

近以中均

君より切きそ強ゆる常おれりて強ゆる中とく分

永く申さるゝ川を渡りてあり

奚云以天源門倚之象也此乃天此處著形也

元世宗

又初に是を我う物として北軍よ云々

まゝくあふ

源以爲人而爲之

物之

海の中におよぶの毎に建たあそびを物とて

極めたるうなる極

寒く死に福なり

知やけにおろそかに
しなす

中將貴首よりいふに、さうく宮下は、本九郎と云
秘 九人夢中よりいふに、さういふに、さういふに

いふに、さういふに、さういふに、さういふに

人なり、さういふに、さういふに、さういふに

物なり、さういふに、さういふに、さういふに

秘 中ね、初より、源へ、改め、さういふに、さういふに

秘 源乃、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

さういふに、さういふに、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

此川并、改め、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

秘 中ね、初め、中將の、人なり、さういふに、さういふに

わあおひまりみーのいりーの殿なり
みーの御子

源氏皇子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

みーの御子れまらえりー

母宮より

後意中まよふなり

けりし中よりいふ人あり

帝よりぬきせりしなり

是よりて弟子なり

ありて人いふなり

弘徽殿の御所なり

弘徽殿よりいふなり

これよりいふなり

朱雀院の御所なり

これよりいふなり

桐帝の弘徽殿なり

これよりいふなり

是よりいふなり

これよりいふなり

少名御名細いなり

秘 二十余年

松云よりいふなり

世よりいふなり

中宮入りなり

後意中よりいふなり

宰相より

源より

これよりいふなり

是よりいふなり

弘徽殿の御所なり

弘徽殿よりいふなり

弘徽殿よりいふなり

弘徽殿よりいふなり

弘徽殿よりいふなり

これよりいふなり

秘源より

これよりいふなり

伊勢の御所なり

弘徽殿よりいふなり

弘徽殿よりいふなり

